



## 難民キャンプ体験報告

岩瀬一郎 日本ルーテル神学大学4年

交流して行くことで援助が協力となり、協力が共同となり、地球市民としての意識が芽生える

岩瀬一郎さんは、佐藤哲哉さんとともに、わかちあいプロジェクト主催のケニア、北西にあるカクマ難民キャンプ（おもにスーダン難民、人口6万人）のボランティア活動に8月の3週間参加された。

私が、カクマ難民キャンプで出会った人々は、日々戦争の恐ろしさを訴えていました。現在でも、スーダンの国内では、政府と南部の反政府勢力との間で争いによって、多くの人が亡くを流し、死んでいると聞きます。スーダン難民の多くは、反政府活動のための軍事訓練を受けていた少年たちです。彼らは幼い頃から連れ去られ、軍隊の生活の中で育ったため、自分の部隊、自分の村、さらには自分の両親や自分の家族の記憶さえありません。彼らは軍隊の生活によって精神的な傷を負われ、戦火に巻き込まれることを恐れ、地雷の恐怖からキャンプ内

の安全な道でさえ、道の真ん中しか歩けない少年がいます。

難民たちは、移動の自らがなく、キャンプ内でしか難民としての権利は保障されていません。キャンプ内での彼らの生活には、ほとんど雇用もなく、教育も十分ではありません。このため、彼ら多くは、することもなく日々、祖国や家族のことを憂いながら生活しています。そのため精神的に参ってしまい、ナイロゼやアルコール（自分で作る）依存症になってしまふ人も多く目につきました。これらの対策として、多くのソーシャルサービス・プログラムが行われており、成果を上げています。ですが、このプログラムも、キャンプ内の移動手段（自動車、バイク、自転車）や物資の不足のために、十分にその機能を活用できないといった現状です。

私たちは、同じ地球の住民として、生



一緒に音楽を楽しむ岩瀬さん

まれた国や、民族、宗教の違いによって、このような苦しみの中にいる人々や、このような状況を生み出す不条理を理解し、彼らとさらに交流してゆくべきではないでしょうか。物質的な援助も深刻な課題ですが、私たちが交流して行くことで援助が協力となり、協力が共同となり、地球市民としての意識が芽生えて行くのではないかと、私はカクマで学びました。（来年、1995年8月もカクマキャンプでワークキャンプを計画する予定です）

## 自立支援 カンボジア帰還難民に牛を贈ります

本年の4月から、皆様に参加を呼びかけています牛の支給プロジェクトの現状と取組を見るために、7月11日から1週間、カンボジアのプノンペンとバタンバンを訪問しました。その間、現場のスタッフと牛の支給を受けている村人とお話し、こちらが希望するパートナーシップの関係づくりや、カンボジア帰還難民（一部、村の恵まれない人を含む）の方たちに、日本の皆様からのメッセージをお伝えしました。

現在までに、すでに30名の方が、申し込んでくださっています。現地では、協力団体のルーテル世界連盟・世界奉仕部、カンボジア政府農業省、カンボジア赤十字、カンボジア女性協会の10名のスタッフが、昨年からの牛の支給に取組、すでに700頭余りを支給しています。4月に前もって、わかちあいプロジェクトから送金した私たちのお金で、7月に68頭を支給したとのことでした。子牛も生まれてい



左はカンボジア農業省の職員マク・ソチリチ、右は帰還難民のコーディネーターのジョセフ・ハリエルさん



集まった帰還難民に日本の支援者のメッセージを広げる松木

ました。

牛の売買契約からはじまり、帰還難民の受取契約および返却の約束など、事務処理も細部にわたってなされており、信頼できる体制で仕事が進められています。

バタンバン省は、ポルポト派の拠点のバインに近く、治安が心配されますが、私たちが心配するほどでもなく平穏な様子でした。バタンバン省は、土地の余裕があり、帰還難民の多くがこの地に帰還し、平均して1家族に1ヘクタールの土地が、稲作用に分配されています。2頭一組の牛を、3家族で協同で管理し、

田圃の耕作、苗代づくりそして物資の運搬に用います。7月に支給された時点では、牛がまだ訓練されておらず、デモストレーションに私のために限で耕そうとしましたが、中には言うことを聞かない牛もいました。牛は耕作には向いてはならない動物ですが、それと共に、糞は有機肥料として大変大切です。カンボジアでは人糞は使わないようです。

700頭の牛は、350組になり、1,050家族、1家族平均5とすれば、およそ5,250人の生活を支えていることになりました。（松木）

## わかちあいプロジェクト募金

# カクマ難民キャンプ支援・カンボジア帰還難民自立支援のために

スーダン、旧ユーゴ、ソマリア、ハイチ、ルワンダと世界各地で民族紛争が続き、何をどのように支援したらいいのか支援する側も混乱状態に陥ります。ルワンダの難民救護にも私たちの仲間が、現在も取り組んでいます。カクマキャンプでの3週間のボランティアの後、佐藤哲哉さんは、LWFの救護機に便乗して、ザイールのゴマのルワンダ難民キャンプを8月27日から4日間訪問しました。

彼の訪問が新聞に載ったことがきっかけで、自衛隊のゴマ派遣先遣隊にゴマの様子を報告するよう依頼されるハブニングもありました。

しかし、学生連からカクマキャンプの報告を受けるにつけ、私たちの限られた力を分散させるでなく、当面、カクマの難民支援を継続したいと思っています。



救護機に乗り、ゴマに向かう佐藤哲哉さん



難民の人たちにとって古着を手に入れるのも大変。7月に古着41箱とカンコン9千食をケニアに送りました。



## 学校建設とワークキャンプ

難民救護の募金は、1992年10月から、ソマリアへの救護物資の空輸費用を目的に開始しました。ソマリアの緊急事態が治まると共に、昨年、夏以降は空輸は行っていないせん。

また、ソマリア国内およびケニア国内の「難民キャンプとパートナー」としての協力関係が持っていることから、LWF（ルーテル世界連盟）がキャンプの運営の責任を持つ「カクマ」の難民キャンプと協力して支援にあつています。

これからの募金目標は、約6万人の難民キャンプの多数を占める子供たちの教育プログラムおよび学校建設の費用に当たりたいと思います。

世界の焦点が、ソマリア、ルワンダと移って行くなかでカクマ（主にスーダン難民）は忘れられ、なかなか資金が集まりにくくなっています。しかし、決して問題は解決したわけではありません。とくに、将来を担う子供たちに希望を与え

る機会を与えることは、大変に重要です。来年の4月には、ワークキャンプの参加者で現地へ、8月に学生をカクマに派遣して公認し、ともに学校建設に協力したいと思っています。学校の建設資金のためにご協力ください。

## 募金の目的と目標

- カクマ難民救護 200万円  
学校建設のため  
その他の教育プログラムのため  
ワークキャンプのため
- 自立支援 600万円  
カンボジア帰還難民に牛を贈るため  
●その他の緊急援助
- 募金目標額 800万円

## 募金の送金

郵便振替口座  
わかちあいプロジェクト募金  
東京3-762258

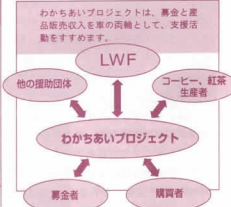
## お知らせ

●わかちあいプロジェクト例会を8月を除く、毎月第3火曜日の午後7時から行なっています。歓迎いたしますので、お出席ください。

●翻訳ボランティア募集！  
牛のプロジェクトのカンボジアの家族の情報が、英語で送られてきます。それを日本の支援者のために日本語に訳す仕事です。

●あんさんぶるVEGA CD製作発売中  
わかちあいプロジェクト、トランスフェリアー ジャパン、アジア学院に賛同協力するためのCDです。売上の一部が支援されます。

「難民とつながる牛の贈り」  
ビデオと音楽CD集「VEGA」  
ICD-1240  
定価3000円（送料別）  
問い合わせ先：中野隆雄  
TEL/FAX: 0475-38-0481



発行所 わかちあいプロジェクト 130 東京都墨田区江東橋6-3-1 電話: 03-3634-7867 FAX: 03-3634-7808  
編集者 松木 保 郵便振替口座 わかちあいプロジェクト 東京8-758331 (コピー・紅茶支払い用)  
わかちあいプロジェクト募金 東京3-762258 (募金用)